

新刊紹介

Lüth, M. Mosses of Europe, A Photographic Flora. 1,360pp. (2019). 自費出版. 定価 €159.00 (3巻セットのみでの販売) (ISBN: 978-3-00-062952-5).

ヨーロッパに分布するセン類, 約 1,250 種について, 生育地, コロニー, 植物体, 植物体各部の顕微鏡像からなる 10,000 枚を超えるカラー写真を収録した図鑑である. 北はアイスランド, ノルウェー領スヴァールバル諸島, 南はクレタ島やキプロス, 西はポルトガルやアイルランド, 東はコーカサス地方までを対象範囲としており, マカロネシアやトルコ, ジョージアは含んでいない. それぞれの種について A 4 サイズ 1 ページが費やされ, ページ上半分に生育地とコロニーの様子, 下半分に配偶体と孢子体の全形, 複数の葉の全形, 葉身の拡大図, 葉や茎の断面などがスケールとともに掲載されている. 種名とシノニムのリスト, 使用した標本の採集地, 採集者, 標本番号以外の文字情報は全くなく, 写真のみでそれぞれの種の特徴を示すという非常に割り切った構成となっている. 撮影された植物体各部の名称すら記載がないので初学者は戸惑うと思われるが, これだけ多くの種の写真が微細な形態も含めて示された図鑑の出版は類例がなく, 研究・同定のための補助的な資料として非常に価値があると思える. 顕微鏡写真の像質があまり良くないものも散見するが, ほとんどの場合, 植物全体像, 茎, 葉, 細胞の形や大きさを理解するには十分な情報量がある. ただし, 孢子体については, 全体像と孢子以外に写真が掲載されていない場合が多く, 本書から得られる形態情報は限られる.

著者の Michael Lüth 氏は, Albert-Ludwig 大学で生物学のディプロマを得たのち, 自宅に顕微鏡を備えた研究室を構え, 長年, 在野の植物研究者として活動をしている. ドイツ国内に分布するギボウシゴケ科 Grimmiaceae の顕微鏡撮影を始めたのが 2003 年で, そこから対象分類群や調査地がドイツ国内を超えて広がり, この写真図鑑の企画に至っているようである. しかし, これほどの種数について, 独力で写真を集めることは著者だけの努力では不可能である. 序文を読むと, 50 人以上の愛好家や研究者が写真提供に協力していることが分かる. 同定の正確さを担保するため, ヨーロッパ各地の植物標本庫から借用した標本も用いられ, 大学やハーバリウムのセン類の分類の専門家にアドバイスも受けている. 多くの人々の協力があって, このプロジェクトが成

し遂げられたようである.

本書は, 著者が運営している Web サイト <http://www.milueh.de/index.htm> からの購入が可能である. 著者が長年のフィールドワークで撮りためた蘚苔類の生態写真は, 一部が Web サイトで無料公開されており, 高精細な写真データは DVD や CD としても販売されている. それらは本書とは異なり, タイ類, ツノゴケ類の情報も含んでいる. (嶋村正樹)

Pressel, S., Matcham H.W., Supple, C. & Duckett, J. G. Mosses, Liverworts and Hornworts of Ascension Island. 137pp. (2018). NatureBureau. Newbury, UK. 定価 £12.95. (ISBN: 978-1-874357-80-3)

アセンション島 (Ascension Island) は, 南大西洋に浮かぶ火山島で, イギリスの海外領土「セントヘレナ・アセンションおよびトリスタンダクーニャ」を構成する島の一つである. 大西洋中央海嶺上の南緯 7°56'0", 西経 14°22'0" 付近にある周囲から隔絶された火山島で, 面積 90 km², グリーン山 (859 m) が島の最高峰である. 本書はロンドン自然史博物館に勤務する著者らがアセンション島在住の研究者とともに, 2013 年から 2014 年にかけて行った蘚苔類の調査をまとめたものである. セン類 60 種, タイ類 23 種, ツノゴケ類 4 種, 計 87 種を記録し, 300 枚以上の生態写真と顕微鏡写真, 多数の地図と図版で, 島のコケ植物フロラと特異な生態系を紹介している. アセンション島は気候的に熱帯海洋性気候に分類される地域ではあるが降水量が少ないため, 海岸周辺にほとんど植生が発達せず, 山地にも樹林が乏しい. しかし, 19 世紀以降, 草本から樹木まで 200 種以上の植物が移入されたことで, 標高 700 m 以上の高湿度となる地域には, おそらく世界で唯一の「人工的な雲霧林」が成立し, 在来の蘚苔類の旺盛な生育が見られるようになった. 通常は岩上や樹幹に生えるホウオウゴケ属 *Fissidens* がショウガ科の広い生葉上に生えている様子, 竹林にアミバゴケ属 *Anastrophyllum* やオオサワラゴケ属 *Mastigophora* が生え, 竹の節の部分に巨大な球状のコロニーを作っている様子などの写真が掲載されており, 不思議な景観に驚かされる. 4 種のツノゴケ類のうちの 1 つ, *Anthoceros cristatus* は, Stephani (1916) の原記載以来, 分類学的な実体がよく分からなかったが, 今回の調査で得られた標本で, この島固有の種であることが

明らかになった。87種の蘚苔類のうち12種、実に約14%が固有種であり、100万年前の海底火山の噴火により出現したとされるこの絶海の孤島で、コケ植物のどのような進化が起きたのか興味深い。

(嶋村正樹)

村松美賀子・伊藤存(著)．新装版 標本の本—京都大学総合博物館の収蔵室から．300頁．(2019)．青幻舎．定価 ¥1,500．(ISBN: 978-4-86152-724-1)．

本書は2013年に出版された同名書籍の新装版で、理学書的な図版集とは異なり、ライター・美術作家らのアーティストチックな編集により、博物館に収蔵されている標本の魅力が表現されているユニークな本である。京都大学総合博物館は、1897年の大学創立以来の収集した学術資料収蔵点数が260万点を誇る日本でも有数の大学博物館で、2001年に現在の京都市左京区に開設されている。前身となる施設は大正時代に開設された文学部陳列館だが、現在は自然史研究関連の展示に大きな力が注がれている。本書で紹介されているのは、一般には非公開の地下収蔵室に眠る魚類、爬虫類の液浸標本、ほ乳類、鳥類の剥製や骨格標本、昆虫標本、維管束植物の押し葉標本、鉱物・岩石標本など、自然史に関わる様々な標本である。自然史研究の素人である著者らが、標本庫を「取材」する立場で、剥製標本の動物の表情に注目したり、古い植物標本を包んでいた新聞紙が地方の歴史研究の貴重な資料になった例を紹介したりと、自然史研究の道具として以外の標本の魅力を引き出してくれる。標本はなぜ必要なのか、なぜたくさん標本を作るのか、なぜいろんな標本作成の方法を使い分けるのかなどの素朴な疑問、種をどう決めるかといった同定方法の話、新種記載の際に重要なタイプ標本の話などについても分かりやすい簡易な説明がある。個人的に興味深かったのは、アカネズミの研究者のサンプリングに同行し、標本作成まで見学した様子を説明したエピソードである。採集地は桂川の河川敷で、トラップを仕掛けてから回収するまでのワクワクする感情が、スナップ写真と新鮮な文章で訴えかけてくる。ネズミの皮をはいで、平たい皮だけのフラットスキン標本にする作業過程は、伊藤存氏のユーモラスにも見える鉛筆画で示されており、理学書のリアルな図や写真とは違った想像力を掻き立ててくれる。本書は、読者自身の自然科学への素朴な興味が芽生えた過去を思い出させてくれると感じた。

旧版がA4横版で定価3,200円であるのに対し、

新装版は文庫サイズで1,500円になった。サイズが大きい旧版のほうが写真の迫力があるが、安価かつ省スペースで手元に置いておきたい場合には新装版がよいかもしれない。新装版には旧版にはなかった小説家の小川洋子氏による解説も加わっている。

(赤司 一)

左木山祝一(著)．コケの国のふしぎ図鑑—ミクロの写真で楽しむ—．175頁．(2019)．エクスマレッジ．定価 ¥1,600．(ISBN: 978-4-7678-2644-8)

本書は158種のコケ植物を「平地」、「山地」、「岩やコンクリート壁」、「木の幹」、「水辺」の5つの生育地ごとに5章に分けて紹介している。見かけたコケの種類について生育地を手掛かりに、身近に見られる種類の名前を簡単に調べるのにも適していると思えるが、「ミクロの写真で楽しむ」という副題にある通り、ルーペや顕微鏡でのコケ観察へ読者をいざなうことをめざした図鑑である。虫眼鏡で見た視点、高倍率ルーペで見た視点、顕微鏡で見た視点などの様々な倍率で、葉や無性芽、胞子体の萌など肉眼では気づきにくい小さな構造の写真が載せられている。倍率ごとに異なる様相を楽しめるコケ観察の楽しさ、奥深さをよく紹介できていると感じた。コケの植物分類学的な定義、体のつくり、生活環、用語集など観察に必要な基礎知識も載っており、コケのことを全く知らない読者にも配慮されている。各章末に登場するコケテラリウムは、鎌倉でテラリウムの制作教室や販売を手がける「苔むすび」の園田純寛氏が制作したものである。コケを採取した生育地の違いごとに、テラリウムに用いる時の留意点が書かれており、コケの栽培や、テラリウムを楽しむ愛好家には有益な情報となるだろう。

多くの人々には、コケ植物はただの緑色の塊といった印象しかないかもしれないが、本書を読めば、小さいながらも不思議な形の宝庫だということがよく分かるであろう。私も大学の研究室でコケを顕微鏡で見ると、美しい規則的な形や、その形が種類ごとに全く違うということを知らなかった。本書によって、新たに、顕微鏡で観察するコケの世界の魅力に取りつかれる読者もいることであろう。

(郷良秀一)

福島 司(編著)．図説日本の植生，第2版．186頁．(2017)．朝倉書店，東京．定価 ¥4,800 + 税．(ISBN: 978-4-254-17163-1)．

日本は南北に長い列島のため、亜寒帯から亜熱帯まで気候帯が幅広く存在する。また、高い山脈により日本海側と太平洋側で気候が異なっている。さらに、陸から大きく離れた海洋島、湿地や河川、海岸などの様々な環境が存在する。これに歴史的な人間の活動が加わり、非常に複雑かつ多様な植生となっている。本書は日本で見られる多様な植生を、多くの写真や図表を駆使して、分かりやすく概説するものである。初版は2006年に出版されたが、その後研究が進んだり、充実が望まれる項目があったりということで改訂が待たれていた。第2版では各植生について、新しい研究成果や見解などの内容が織り込まれている。また、初版と比較すると新しい執筆者が加わり、ヒコピア会会員も含む専門家25名が分担執筆をしている。内容は三部構成となっており、第一部は日本の植生全体の概要がまとめられ、植生分布の特徴や花粉や化石にもとづく古気候の変化からみた過去数万年の植生変遷史などが解説されている。第二部では、亜熱帯から暖温帯、亜寒帯、高山に至る日本の各森林帯の自然植生や二次植生の紹介、さらに、湿地や湿原、海洋島、海岸、河川など、日本の様々な環境の植物群落の性質や分布、構成種の生態などの詳細が解説されている。ため池や水田、畑、人里環境、都市などの人為的な立地での植生や、帰化植物についての解説もある。第三部は特定の地域固有の植物群落の解説であり、本州中部の亜高山帯上部のモミ林でみられる縞枯れ現象、季節風によって高山の日本海側と太平洋側で異なる植物群落が発達する季節風効果、日本各地で偏った分布を見せる湿性ブナ林を形成する平尾根効果などが解説されている。

同名あるいは類似の他書と比較すると初学者向けに簡潔にまとめられた内容であると同時に、本書を通じて日本の植生の現在の知見を広く手に入れることができる。植生学を志す者にとっては必携の書であるとともに、植物の生態に興味を持つ人々に広く推薦できる。(小山克輝)

片野田逸朗(著)。琉球弧・植物図鑑, from AMAMI. x + 296 頁。(2019)。南方新社、鹿児島。定価 ¥3,800+ 税。(ソフトカバー) (ISBN: 978-4861244056)。

本書は奄美群島を中心とした琉球弧の維管束植物をまとめた図鑑である。本書の著者はヒコピア会のメンバーで広島大学のOBでもある片野田氏である。著者の著書として、1999年に、年出版された『琉球

弧・野山の花, from AMAMI』[大野照好(監修)、片野田逸朗(写真と文)]がある。本書は前著の補遺版的な位置づけと考えることができる。前著では草本類が多く、野外実習などで利用する際に木本類の項がやや物足りなかったが、本書では木本類の割合が全体の約1/3になっている。前著では約550種の維管束植物が掲載されていたが、本書では約800種が掲載されている。構成は、「はじめに」、「目次」、「この本のまとめ方」に続いて、「植物各部の用語解説(葉・花・果実・シダ植物)」、「第1章 木本類」、「第2章 草本類」、「第3章 つる植物」、「第4章 シダ植物」となっている。前著では海辺、人里、低地・山地というカテゴリで植物が並べられていたため調べにくい場合があったが、本書で採用された並びは前著よりも調べやすくなっている。その後、「奄美群島における希少野生植物の指定状況」、「学名(科名・属名)索引」、「和名索引」、「主な参考文献」が続く。装丁は前著と同じA5版のソフトカバーで野外でも扱いやすい。前著では透明のカバーがあったが時間とともに縮む難点があった。今回はそのようなカバーはなく、一般的な紙製の表紙カバーになっている。本書の最大の特徴は植物の写真である。写真の一部に大隅半島や薩摩半島、植栽などの表記があるが、写真のほとんどが奄美大島や徳之島などの奄美群島で撮影されたものである。前著と同じ種であっても、写真は新たに撮影されたものが使われているようで、サイズも大きめで細部が見やすい。被子植物はAPG分類体系に準拠しており、ムヨウラン属などのような新しい情報も盛り込まれている。ハイニシキソウのように前著に掲載されていた種で含まれていないものが一部にあるが、希少種や固有種はもちろん一般種や外来種も多く解説されている。本書は、奄美をはじめ琉球弧で植物観察をする際に手助けとなる必携の書といえる。(坪田博美)

中西弘樹(著)。日本の海岸植物図鑑。271 頁。(2018)。トンボ出版、大阪。定価 ¥12,000+ 税。(ハードカバー) (ISBN: 978-4-88716-137-5)。

海岸植物に関するまとめた図鑑はこれまであまり多くなかったが、本書は日本列島の海岸植物をまとめた図鑑である。本書の著者はヒコピア会のメンバーで広島大学のOBでもある長崎大学名誉教授の中西博士である。234種の維管束植物が掲載されており、カラー写真がふんだんに使われている。本書は大きく7章から構成されている。「はじめに」で

は海岸植物についての説明や、著者が海岸植物を研究するに至った経緯などが記されている。「目次」と「凡例」に続いて、植物の解説が立地や地域ごとにまとめられている。「I. 海岸の環境と海岸植物」では、海岸という環境とそこに生育する海岸植物の特徴や区分が説明されている。「II. 海浜植物」では、海浜植物の生態や生活形、種類と分布、種子や果実、植生のゾーネーションが説明され、その後にマツナやハマヒルガオなど39種の解説がある。「III. 塩生植物と半マングローブ植物」では、塩生植物や半マングローブ植物について生態や種類、植生について前章と同様に説明があり、その後にシバナやフクドなど20種の解説がある。「IV. 海岸崖地植物」では、海岸崖地植物についてその生育環境や生態、種類、植生などについて説明があり、その後にハマナデシコやクサスギカズラなど40種の解説がある。「V. 海岸林・林縁部の植物」では、海岸の低木林やその林縁の植物について説明があり、その後にハマヒサカキやトベラなど10種の解説がある。ここまでは本州から四国、九州を中心とした地域の海岸植物がまとめられているが、残りの2章はそれ以外の地域をまとめた内容になっている。「VI. 南西諸島の海岸植物」では、前章までと同様の区分で「1. 海浜植物」(19種)、「2. 塩性植物とマングローブ植物」(14種)、「3. 隆起サンゴ礁・海岸崖地植物」(26種)、「4. 海岸林の植物」(23種)に分けて解説されている。はじめに南西諸島の海岸植物について、その分布や植生の特徴に加えて、この地域を特徴づける隆起サンゴ礁や海岸林について説明がある。その後、ヒルギ類やミミモチシダなど、区分ごとに解説がある。「VII. 北日本の海岸植物」では、VI章と同様の構成で、東北地方北部から北海道の海岸植物が解説されている。区分としては、「1. 海浜・海岸草原の植物」(18種)、「2. 塩生植物」(10種)、「3. 海岸崖地植物」(15種)

となっている。この章では北日本の海岸植物についてその分布や植生に加えて、この地域を特徴づける矮小低木帯や塩生植物について説明がある。その後、ハマナスやアッケシソウなど、区分毎に解説がある。最後に、「主要参考文献」や「学名索引」、「和名索引」が続いている。コラムが各章の中に配置されるように6つある。コラムでは、天然記念物や果実や種子の漂着、外来植物、絶滅危惧種に関する内容が含まれており、地球温暖化による分布変化などにも触れている。植物の解説では、それぞれの種について1頁が割り当てられ、説明と写真がある。各種の説明では、学名や所属(APG分類体系と旧体系)、生育立地、分布域(世界での分布と日本国内の分布)、形態、生態、ノートが示されている。ノートには和名の由来やにおいなどの特徴、他種との区別点などが書かれており、大変参考になる。写真は1つの種について花や果実、生育立地など複数掲載され、野外での理解の助けになる。著者は海岸植生や海岸植物、種子散布などについて長年調査・研究を続けているが、これまでの実践にもとづいた内容が本書にふんだんに盛り込まれている。本書のサイズはB5版で野外には持ち出しにくい、ハードカバーでしっかりとした体裁になっている。本書は北海道から南西諸島まで広い範囲の海岸植物を網羅するとともに、一般的な植物図鑑にはあまりない植生や環境に関する解説もあり、日本の海岸植物について非常にわかりやすく解説された良書である。是非手元に置いておきたい一冊といえる。なお著者の中西博士は、本書も含めて、これまでの海岸植物や種子散布などに関する業績が認められ、第27回(2019年)松下幸之助記念賞を受賞されている。講演会の内容は<http://matsushita-konosuke-zaidan.or.jp/works/flowerprize/lecture/2019/index.html>(2019年11月1日閲覧)でみるできるので参考にさせていただきたい。(坪田博美)